「篝火（かがりび）」
1982年、紙本彩色
53・2チセン×72・8チセン

工藤甲人（くどうこうじん）（1915～2011年）

〈名画の扉〉 大川美術館企画展から

夜の闇に溶け込んでいた桜の花が、篝火の炎によってじんわりと照らし出され、白く輝いています。まだ多くついているつぼみや緑の葉も所々見え、桜の神秘的な生命力を感じさせます。夜桜の迫力が幻想的に描き出されている本作。画面左端にも少し篝火の光が漏れ見えていることから、この風景が続いている様子を思い浮かべることができます。

工藤甲人は青森県弘前市に生まれ16歳で画家を志し、19歳で上京。新聞配達などで働きながら川端画学校で日本画を学びます。15～16世紀のオランダの画家、ヒエロニムス・ボスに影響を受け、幻想的な作風へと進みました。

創造芸術や新制作展などで活躍した工藤は、東京藝術大学の教授も務め、後進の指導にもあたりました。本作が描かれた翌年には、12年間携わった東京藝術大学を退官し名誉教授となっています。その後も活躍し続け、96歳の誕生日を前に、自宅のあった神奈川県平塚市内でその生涯を閉じました。

（池田）